

「ザ・ロード」 ★★★

2010（平成22）年5月13日鑑賞
＜角川映画試写室＞

監督：ジョン・ヒルコート
男／ヴィゴ・モーテンセン
少年（男の息子）／コディ・スミット＝マクフィー
老人／ロバート・デュヴァル
復員軍人／ガイ・ピアース
復員軍人の妻／モリー・パーカー
盗人／マイケル・ケネス・ウィリアムズ
ギャングのメンバー／ギャレット・ディラハント
女（男の妻）／シャーリーズ・セロン
2009年・アメリカ映画・112分
配給／ブロードメディア・スタジオ

＜『ザ・ウォーカー』はなぜ西へ？本作はなぜ南へ？＞

「ある事情」による人類の壊滅的打撃。その中で生き残った主人公は、何を指しどのように生きていくのか？そんなテーマの話題作の1つが、ウィル・スミス主演の『アイ・アム・レジェンド』（07年）だったが、私の採点は星2つ（『シネマルーム18』369頁参照）。それに対して、同じテーマの大傑作が4月15日に観たデンゼル・ワシントン主演の『ザ・ウォーカー』（10年）だった。それは、地球上に残されたたった1冊の本というストーリーの軸が秀逸だったため。

デンゼル・ワシントンはひたすら西に向かって歩いていたが、それは一体なぜ？人類の壊滅的打撃。それは本作も同じだが、その中で生き残った父親（ヴィゴ・モーテンセン）と息子（コディ・スミット＝マクフィー）は今、南へ南へと歩いていたが、それは一体なぜ？『ザ・ウォーカー』では、主人公がなぜひたすら西に向かって歩くのかがなかなか明かされず、ラストにあって驚く展開が待っていた。それに対して、本作の父親と息子がひたすら南へ向かって歩くのは、極度の寒冷化によってこのままでは冬を越せないためらしい。なるほど、なるほど。そんな動機はわからないでもないが、人間の足は寒冷化のスピードを上回るの？そんな意地悪な疑問も湧いてくるため、「ある事情」のためひたすら西を目指して歩くという『ザ・ウォーカー』の説得力に比べれば、南を目指す本作の説得力はイマイチ・・・。

＜「善き者」と「悪しき者」の区別は？＞

本作は父と子の感動の物語。息子は地球が壊滅的打撃を受ける頃に男の妻（シャーリーズ・セロン）が生んだ男の子だが、妻は息子を生んだ後数年して男の制止を振り切り、生きていくことを見限ってしまった。壊滅的打撃から10年以上経った今、地球上に食料が欠乏していたのは当然。したがって、生き残った者たちがその奪い合いをする風景は、『ザ・ウォーカー』と同じだ。もっとも『ザ・ウォーカー』では水が貴重品だったが、本作では水はいくらでもあるようで、そこも私にはイマイチ不思議なところ。

それはともかく、南へ旅する中で父が息子に教えるのは、自分たちは「善き者」だということ。その理由は自分たちは「火を運んでいるから」ということだが、さてその意味は？本作ではこの2つがキーワードとなるが、果たして「善き者」とは一体ナニ？そして、「悪しき者」との区別は一体どこで？本作中盤に至って「人間貯蔵庫」というショッキングなシーンが登場するが、それは一体ナニ？かつて日本陸軍が決行したインパール作戦では、補給線を軽視した作戦のため将兵たちは人肉を食ったという話がある。そんな話を思い出しながら、息子が父親に対して語る「僕らはどんなにお腹が空いても人を食べないよね？」と言うセリフを聞くと、「善き者」と「悪しき者」の区別は、ひょっとして・・・？

＜逆境の中でこそ強まる父と子の絆だが・・・＞

『ザ・ウォーカー』は一人旅だったが、本作は父と子の2人旅。映画はひたすら南へ歩いていく2人の「善き者」たちに訪れるさまざまな試練を描いていく。最初の試練は「悪しき者」たちとの遭遇だったが、その後は老人（ロバート・デュヴァル）との出会い、やっと到着した浜辺での盗人騒動そして廃墟の町において矢で足を射抜かれるというハプニング等々だ。そんな中でトコトン問題提起されていくのが、男の生きることへのこだわりと息子に対する無限の愛。次々とシチュエーションを変えて2人の「善き者」に対して提起される事態を、私たち観客はどのように見守ればいいのか？

他方、いろいろやっていけば悪いことばかりではない。食料品がごっそり詰まった地下シェルターを発見した時の、男と息子は天にも昇る心地だったはず。誰にも発見されることなくここを本拠地として生きていくことができれば申し分ないが、さてそれは？このように、逆境の中でこそ、また絶望的な状況下でこそ父と子の絆は強まっていくのだから、それを額面どおり受けとめれば本作は感動的。しかし同時にあまりにも重いテーマが次々と突きつけられるため、観客は少し疲れてくる面も・・・？

＜ラストには違和感が・・・＞

本作を鑑賞するについては、男の妻が生きている時にテーブルの上で確認した拳銃の弾丸の数をしっかり頭に入れておく必要がある。1発目を使って射殺したのは「悪しき者」だったが、その後、男はどんなシチュエーションで弾丸を使用？本作が描く男の最後はトコトン悲しいシーンとなっている。しかし、こんな状況下で子供が一人に残されたらどうやって生きていくの？「決して手放すな」のセリフとともに男が息子に渡すのがあの拳銃だが、さてその中に弾丸は何発？

ところがそんな中、父親と入れ違いになるかのように突然登場してくるのが1人の復員軍人（ガイ・ピアース）。一瞬「あれ、この男は何だったかな」と考えたが、やはりこの男の登場はこれが初めてだ。なぜ、ここにこんな男が？もしこの男が「悪しき者」だったら、確実にこの子はアウト。さて、子供から拳銃を向けられた復員軍人の対応は？

『ザ・ウォーカー』のラストは、たった一冊の聖書は奪われたものの、頭の中に刻まれた聖書の言葉を語っていくというあって驚く展開が待ちうけていたから「こりゃ最高！」と思えたが、それに比べるとこのラストはいただけない。ストーリーの重点を父と子の感動物語に傾注したためか、私にはこのラストの収め方は大いに違和感がある。したがって、『ザ・ウォーカー』は星5つだったが、本作は星3つ。ゴメンね。

2010（平成22）年5月19日記